

大阪大学大学院生命機能研究科

第 10 回 学生主催若手合宿研究交流会

報告書



目次

1	本合宿について	3
2	ポスターセッション	4
3	グループディスカッション	6
4	特別講演	8
5	交流企画	10
6	【合宿前後企画】英語クラス	12
7	【合宿前後企画】ラボツアー	14
8	総括	16
9	合宿運営委員	17
10	謝辞	17
11	合宿アンケート	18
12	英語クラスアンケート	32

1 本合宿について

● 合宿の目的

学生主催若手合宿研究交流会は、イノベーションの礎であり生命機能研究科の理念でもある「異分野融合」を促進するために、学生・若手研究者が主体となった研究交流を目的として開催されてきた。今年度もその目的を継承し、生命分野だけでなく情報科学や基礎工学の分野を横断した異分野融合の場とするため合宿を開催した。

第10回となる今回の合宿のテーマは「Link People, Link Ideas」とした。世界は多様なバックグラウンドを持った人で成り立っている。分野や国など、バックグラウンドが違えば生まれるアイデアも多様なものとなる。合宿を通じて分野や国を超え様々な人々が集まり交流する(Link People)ことで、その違いが生んだ様々なアイデアがつながり(Link Ideas)、異分野融合のきっかけとなることを目指した。

● 概要

本合宿は生命機能研究科の学生とヒューマンウェアイノベーションプログラム履修生が中心となり、企画・運営のほぼ全てを遂行した。本合宿は2016年7月13日(水)から2016年7月15日(金)までの3日間、京都府京都市のKKR京都くに荘にて行った。今回の参加者は合計で52名であり、うち11名を海外から、1名を沖縄科学技術大学院大学から招待した。

合宿の構成は例年と同じく、ポスターセッション、グループディスカッション、特別講演、交流企画の4つのプログラムとした。ただし例年、参加者間、特に国内学生と海外学生の交流が不足していることが指摘されているため、これを解消し、コミュニケーションがとりやすい企画内容とすることを心がけた。ポスターセッションでは発表時間を細かく区切り、できるだけすべての参加者の発表を聞けるようにするとともに、1度聞き逃した発表を再度聞くことができる構成とした。グループディスカッションは1グループを小さくし、黙り込む人が出るのを防いだ。特別講演はできるだけ参加者間で普遍的に興味の持てる内容となるよう、キャリアパスの話題を2名の講師にお願いした。交流企画は1日目から短いセッションを随所に挟み、それらを連動した企画とすることで参加者同士がスムーズにコミュニケーションを行える環境とすることを心がけた。

また、全体として時間に余裕のあるスケジュールとし、参加者間の自由な交流を促進するとともに各企画に集中して取り組める環境とした。たとえば特別講演は1回あたりの時間を短くし休憩を挟む構成とした。

(文責：小森隆弘)

2 ポスターセッション

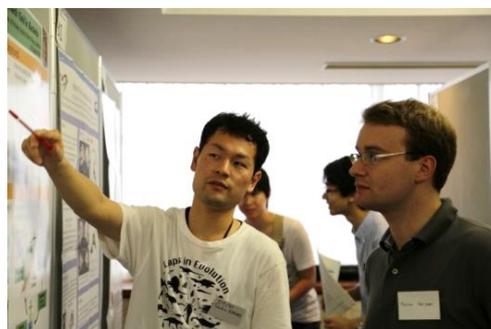
- 目的

様々な分野の研究に触れることを通して、分野の異なる研究を理解する能力を養うこと、および分野の異なる研究者にも伝わりやすいプレゼンテーション能力を磨くことを目的とした。

- 内容

ポスターセッションを行う前に、グループ内のメンバーに対して研究紹介を行う時間を設けた。各自 A4 サイズの縮小版のポスターを用い、グループで 1 時間（一人当たり約 10 分）の研究紹介を行った。この研究紹介は、初めに少人数で発表を行うことにより参加者の気持ちをほぐし、ポスターセッションでの発表を円滑に行うことを目的として導入した。

ポスターセッションに関しては 1 回 20 分の発表を、一人 3 回行った。全発表終了後、ベストポスターを 3 枚選んで投票してもらい、閉会式にてポスター賞（1～3 位）の表彰を行った。



- 実施結果

アンケートの結果によると、グループ内での研究紹介に関しては「満足」「やや満足」の割合は全体の 77%、「どちらとも言えない」が 15%、「不満」「やや不満」が 8%だった。コメントとしては「じっくりと一人一人の話を聞けたので良かった」「研究内容を知るには良かった」などの意見が挙げられた。時間に関しては、短いという意見が多かった。

ポスターセッションに関しては「満足」「やや満足」の割合は全体の 60%、「どちらとも言えない」が 21%、「不満」「やや不満」が 19%だった。コメントとしては「場所によっては人が集まらなかった」「日本人同士では日本語で発表していた」などの意見が挙げられた。時間に関しては、長いという意見と短いという意見が混在していた。

- 考察・改善点

研究紹介に関しては、時間の短さが問題であった。時間を長く設定するだけでなく、全体のタイムキーパーを設置すれば一人当たりの発表時間が明確化し、より円滑に発表を行えたのではないかと考えられる。

ポスターセッションに関しては、ポスターの配置に問題があった。端のポスターには人が集まりにくいとため、壁にポスターボードをくっつけて端の列を生じさせない工夫や、外国人・日本人間での交流を促すために外国人・日本人を混在させた配置にするなどの工夫が必要だと考えられる。

(文責：齊藤紘美)



3 グループディスカッション

- 目的

異分野・異文化の背景を持つ者同士で特定のテーマについて議論を重ねることにより、多様な考え方に触れるとともに意見を発信する練習を行う。

- 内容



グループごとにテーマをひとつ設定し、2時間ほど議論してもらった。テーマは「異分野融合に必要なことは何か」「研究成果をわかりやすく社会へ発信するためにはどうすれば良いか」「皆の研究技術を用いた新規商品の考案」「今後のキャリアパスについて」の4種類から割り振った。各グループには運営委員をファシリテータとして設置し、活発な議論の促進を目指した。最後に全体の前で各グループの考えをプレゼンしてもらった。



- 実施結果

「様々な人の考えに触れることができた」という声が多くあったことから、このセッションが異分野・異文化の人間との交流に役立ったことがうかがえる。全体でのプレゼンでは主に海外からの参加者から活発な質問があったが、運営委員以外の日本人学生で質問をしている学生はいなかった。



- 考察・改善点

テーマをあらかじめ絞ったことで議論の進行方向はスムーズに示されていたかと思われていたが、一方で「別のテーマであればもっと話せたのに」と言った声がちらほらと見られた。今後はテーマを固定するのではなく、多様なテーマを設定しかつグループをスイッチングさせることで、参加者同士がより多くの考えに触れることができるよう工夫したい。

(文責：大西真駿)



4 特別講演

- 目的

各界で活躍する方を講師として招き、経験や考え方について講演を聞くことで、参加者の今後の研究や人生設計、異分野融合の参考とすることを旨とした。

- 内容



本合宿では二人の講師をお招きし、博士学生のキャリアパスについての講演をしていただいた。一人目は京都大学 iPS 細胞研究所 (CiRA) 国際広報室の中内彩香先生で、CiRA での活動などを踏まえ、サイエンスコミュニケーターという仕事についてご講演いただいた。二人目は本学生命機能研究科の助教である山口新平先生で、ポスドクとしてアメリカで研究された経験を交え、若手研究者のキャリアパスについてお話しいただいた。講演は一人 45 分間お願いし、講演後に質疑応答の時間を 10 分間設けた。



- 実施結果

自分たちの将来設計にも関わる内容ということで講演後には活発な質疑応答が繰り広げられ、参加者からは「こんな話をもっと聞きたい」などの声が寄せられた。

- 考察・改善点

例年講師講演は一人 1.5 時間~2 時間で二人の形式となっていたが、本年の講師講演は一人 45 分間で二人の講演とした。これは、せっかく様々な分野から学生が集まっているので講演を聞くより交流、ディスカッションに時間を回した方がよいのではないかという意見があったためである。当初は一人で 2 時間の講演を予定していたが、長すぎるという点と、人を呼んで講演を聞く貴重な機会であるということから時間を 2 分割して 2 人の講師にお願いした。アンケートを見ると長いという意見はなく、時間配分についての満足度も各企画の間で上位となっていることから、当初の動機であった他の企画との兼ね合いを別にしてもこの時間設定への変更は適切であったと考えられる。一方で、講師との交渉を担当する役が一人であり、かつ修士論文執筆で多忙な時期に仕事が集中していた点は改善の余地がある。講師との連絡は外部との交渉が絡み特に負荷の大きい役割であるため、余裕のある役割分担をする必要がある。

(文責：小森隆弘)



5 交流企画

● 目的

これらの交流企画では以下の二点を目的として行った。

- ①合宿序盤に緊張をほぐすことでコミュニケーションをとりやすい雰囲気を作り、異文化・異分野交流を活性化する。
- ②グループ内のメンバー同士の絆を深め、深い異文化・異分野交流を実現する。

● 内容



アイスブレイクではグループのメンバーのことをお互いによく知るために、自己紹介とグループ名決めを行った。自己紹介では自分のことを話しやすいように質問を書いたクジを作成し、その質問に答えるという方式で行った。グループ名決めは各グループメンバーの共通点などを話し合い、合宿中で使用するグループの名前を決める時間を設けた。

レクリエーションでは、ゲームをスタートする前にエクスカージョンの行き先をグループで話し合う時間を設けた。話し合いの際に、主要な観光地の日本語資料を配布し、日本人が外国人の方に説明しなければならない状況を作った。その後、エクスカージョンに使用するバスのチケットを争奪するゲームを行った。英語の得意不得意に関係なく誰でも楽しめるよう、また日本のゲームを外国人の方に楽しんでもらえるように、英語で絵しりとりを行った。

エクスカージョンでは、前日に決めてもらった目的地に向けて、グループごとに分かれ自由に行動してもらった。時間は3時間(+休憩時間1時間)を設けた。

● 実施結果・考察

アイスブレイク企画を初日の一番初めに行ったことで、グループでの親睦を深めるのは非常に速かったと思う。また多数の企画をグループ単位で行ったためグループ内での連帯感が高まり、深い交流が実現できたと思う。レクリエーション企

画に関して非常に好評であり、チームで仲良くなることができた、という意見を頂けた。目的地決定からのゲームでのチケット争奪戦の流れも非常によい構成であったという意見を頂いた。エクスカージョンも同様好評であったが、一方で「時間が短い」という意見が多数あった。

- 改善点

交流企画全体を通して、グループでの深い交流にフォーカスしてしまったため、グループ以外の人との関係が希薄になってしまったように思う。どちらを重視するかとのトレードオフではあるが、グループでの企画と全体での企画の比率を吟味する必要があるかもしれない。

(文責：祐村実旺)



6 【合宿前後企画】 英語クラス

- 目的

合宿参加者の英会話能力の底上げを目的に、合宿開催前に英語クラスを開催した。例年、合宿において日本人参加者と海外参加者の交流が薄いという問題が指摘されてきており、また参加者から英語での研究発表や会話が難しいというコメントもあがっていた。そこで事前のレッスンで英語によるコミュニケーションのハードルを下げることを目指した。

- 内容

レッスンは株式会社アルクから講師を派遣していただき行った。レッスン内容は初対面時におけるグリーティング、効果的なコミュニケーション、ディスカッションの3種類とし、参加者の希望日時や希望内容に応じて時間割を組んだ。また、参加者の英語レベルをできるだけそろえるため TOEIC の点数別にクラス分けを行った。各講座では、まずアルクの講師より英会話において意識すべきポイントの解説がなされ、次に参加者同士が英語で会話を行い解説された事項を実践した。



- 実施結果

2時間のレッスンを1日6コマ、3日間に分けて行った。レッスンには合計で30人が参加し、それぞれ1~5コマのレッスンを受講した。レッスン後のアンケート「Q 2.上記の目的はどの程度達成できましたか」(Q1 で参加目的を聞いた上での質問)では参加者のほとんどが参加目的をある程度、もしくは完璧に達成できたと回答した。また合宿後のアンケートにおいても「Q 25. このレッスンで学んだことは合宿で役立ちましたか?」に対し参加者の半分が「大いに役だった」と答えており、残り半分も「やや役立った」との回答ですべての参加者が効果を実感したことがわかった。

- 考察・改善点

企画内容自体に関してはアンケートからも分かる通り非常に高い評価を受けており、当企画によって英語による参加者間のコミュニケーションを促進することができたと考えられる。一方で運営に関しては企画の遅れや参加者への連絡の不備、直前キャンセルに対する対応など多数の問題が生じていた。特に今回は昨年行っていた手弁当の英語勉強会とは異なりヒューマンウェアの行事として予算の援助を受けていたにもかかわらず、計画立案や実行内容について十分な検討がなされておらずこのような問題が発生してしまった。今後、合宿内外で行事、特に公的な支援を得ている行事を企画する際は、計画の妥当性やもしものときの対応などを早い時期に優先的に検討しておく必要がある。

(文責：小森隆弘)



7 【合宿前後企画】ラボツアー

- 目的

大阪大学に所属する研究室を見学し、海外の方に大阪大学が行っている面白い研究を知ってもらう。さらに、様々な分野の研究室を訪問することで、異分野交流のきっかけとなることを期待した。

- 内容

生命機能研究科、情報科学研究科、基礎工学研究科の三研究科に属する研究室を1日かけて巡り、見学した。当日は4つのグループに別れて行動し、各グループがそれぞれ4研究室を訪問した。



- 実施結果

訪問先研究室の所属学生が、参加者の興味を惹くようなテーマを用意し、また丁寧に説明してくれたため、異分野の研究についての理解が深まり、興味を持つきっかけとなったと思われた。



- 考察・改善点

前年度に続いて、参加者から高評価をいただくことが出来た。その要因として、異分野の研究者でも面白さが理解しやすい研究を行っている研究室を選択できたことが挙げられる。難しい計算式や概念を知らなくても理解できることに重点を置き、実際に体験ができる研究テーマ（VR、ウェアラブル装置等）や目で見て面白さが伝わるテーマ（イメージング、アンドロイド等）を行っている研究室を訪問先として選択した。その結果、例えば情報科学研究科や基礎工学研究科の実際に体験ができる研究テーマを行っている研究室を訪問した際には、生物系を専攻している学生も楽しそうに装置に触れ、積極的に質問をしていた。

反省点としては、準備の遅さが挙げられる。今回は訪問先の研究室が決定したのは7月に入ってからと、かなりバタバタしてしまった。原因として、各研究室への連絡が遅かったこと、いくつかの研究室に訪問を断られてしまったことが挙げられる。訪問先の候補を選出する際に、断られたときの代替案をあらかじめ用意しておく、といった保険をかけておくべきだった。

訪問先の研究室を選ぶ方針は間違っていなかったと思うので、準備の段階で、もっと早く、先を見据えた行動が出来ればよりよいものになるのではないかと。

（文責：長尾壮将）

8 総括

今回の合宿は「Link People, Link Ideas」をスローガンに参加者同士の交流を重視した内容となった。これまでの合宿でも交流は重要視されていたが、そのたびに参加者間、特に外国人と日本人の間での交流の薄さが反省点として指摘されてきていた。今回の合宿では英語への苦手意識がこうした交流の薄さを招いていると考え、1. 事前企画による英語コミュニケーション能力の強化、2. レクレーション企画の充実による、英語の巧拙が障害となりにくい交流の場の提供、の2つの方針で言語による断絶を解消することを狙った。

アンケートの結果を見ると、英語を用いたコミュニケーションについて、「大いにできた」「ややできた」と答えた人が60%を超え、逆に「あまりできなかった」「ほとんどできなかった」と答えた人の割合が15%程度にとどまっていた。過去三年間の合宿と比べて前者は最大、後者は最小の値となっており、これまでの合宿でたびたび問題となっていた参加者間のコミュニケーションの不足がかなり改善されたことが示された。

一方で改善すべき点もあった。企画内容については各企画時間の不足を指摘する声が目立った。合宿中に使える時間は限られているためある程度の割り切りは必要であるが、単純に企画にかかる時間を増やすだけでなく、短時間でも充実した内容となるように企画を立案する必要があると考えられる。また運営にあたって例年にはない不手際も多数存在した。例えばアンケートにてグループディスカッションの評価項目がなく、この企画の成否を判断することが難しくなってしまった。例年に比べ多数の委員の協力が得られたにも関わらずこのように粗が多かった原因としては、委員全員で目指す合宿の具体的なイメージや目標が明確でなく、また委員間で進捗情報が十分に共有されていなかったことで、各委員が主体的に行動しづらい状態に陥っていたことが考えられる。こうした問題の解決のためには、これまでのように事務的な処理だけでなく、チームマネジメントのノウハウも次年度以降に引き継いでいく必要があると考えられる。

若手合宿の開催はついに10回の大台に達した。今後もこの合宿が多くの子、若手研究者の交流の場として、そして修練の場として発展していくことを期待している。

第10回若手合宿運営委員長 小森隆弘

9 合宿運営委員

氏名	担当	研究科	研究室	学年
小森 隆弘	委員長	情報科学研究科	共生講座	D1
竹本 健二	副委員長	生命機能研究科	八木研	D3/D5
大西 真駿	企画総括	生命機能研究科	吉森研	D2/D5
木村 聡志	会計総括	生命機能研究科	小倉研	D2/D5
立川 恭平	広報総括	基礎工学研究科	石黒研	D1
遠藤 志織	広報	生命機能研究科	八木研	D2/D5
小西 理予	企画	生命機能研究科	仲野研	D2/D5
齊藤 紘美	企画	情報科学研究科	共生講座	M2
唐 瓏	企画	生命機能研究科	北澤研	D2/D5
徳田 加奈子	会計	生命機能研究科	山下研	D2/D5
長尾 壮将	企画	生命機能研究科	高島研	D2/D5
中川 文香	広報	生命機能研究科	北澤研	D1/D5
新見 恵理	広報	生命機能研究科	八木研	D2/D5
平岡 陽花	企画	生命機能研究科	上田研	D3/D5
山岸 令奈	企画	生命機能研究科	仲野研	D2/D5
祐村 実旺	企画	情報科学研究科	共生講座	M2

10 謝辞

本合宿はリーディング大学院ヒューマンウェアイノベーションプログラムおよび生命機能研究科の支援のもと開催されました。このような機会を与えてくださった合宿担当教授の難波啓一先生、ヒューマンウェアイノベーションプログラムコーディネイターの清水浩先生、生命機能研究科研究科長の仲野徹先生に心よりの感謝をいたします。また、ヒューマンウェアイノベーションプログラム特任准教授の細田一史先生には様々な形でご支援、ご助言をいただきました。本当にありがとうございました。

海外からの学生の招待にあたっては生命機能、情報科学、基礎工学の各研究科所属の研究室にご協力をいただきました。また、合宿後の研究室訪問についても多数の研究室のご協力のもと実行することができました。厚くお礼申し上げます。

合宿の運営に際し、岡本徳子さんをはじめ生命機能研究科企画室の皆さま、そして谷川京子さんをはじめヒューマンウェア事務局の皆さまに多くのご支援、ご助言をいただきました。ありがとうございました。

その他、合宿委員をはじめ、本合宿の開催にご尽力いただいたすべての皆さまにお礼を申し上げます。

11 合宿アンケート

- 実施目的、結果概要、改善点

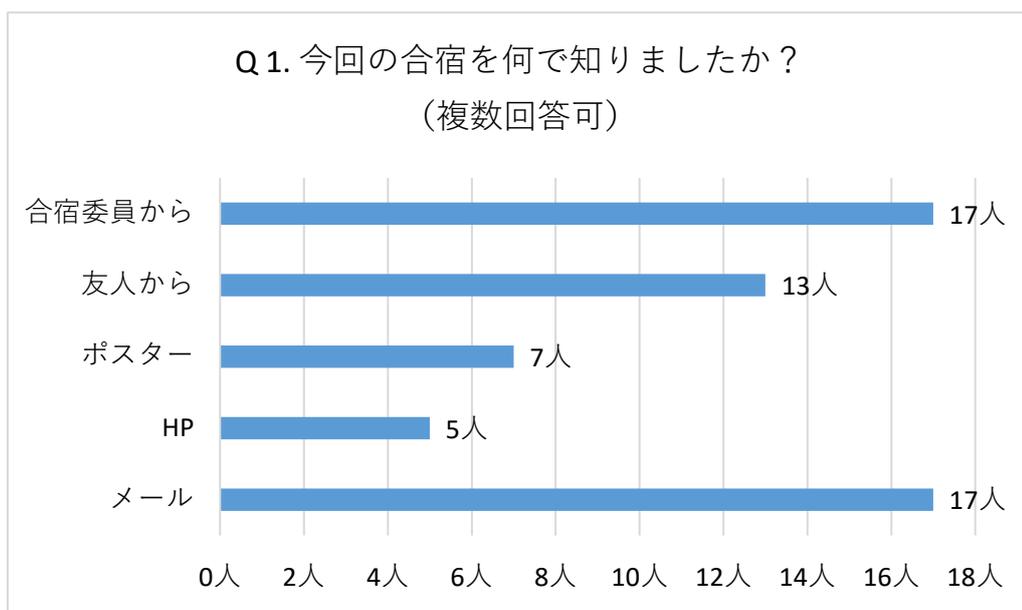
今年度参加者の意見から反省点や好評だった点をまとめ、来年の若手合宿をより有意義なものにするため、合宿後に参加者にアンケートを取った。合宿を知ったきっかけ、参加目的、合宿企画について、目標は達成できたか、各企画の満足度（前後企画も含む）等の項目について回答してもらい、参加者 52 人中 47 人から回答を得た。

改善すべき点として、不備の多いアンケートとなってしまったことが挙げられる。満足度調査の項目において通常とは逆に 1 を満足、5 を不満足としてしまったため、5 を選んでいるにも関わらず自由記述欄はかなり肯定的な内容が書かれているなど勘違いと思われる回答がいくつか見られた。またグループディスカッションについての問いが抜けていたため、この企画については参加者の評価を考察できなかった。これらの不備は、アンケートの作成が合宿直前で、十分に内容を確認できなかったことが原因と考えられる。アンケートについては企画の詳細が決まる前から大部分の項目を作成可能であることから、早い段階で作って合宿直前に微修正することで対応した方がよいかもしれない。

（文責：中川文香、小森隆弘）

- 回答結果

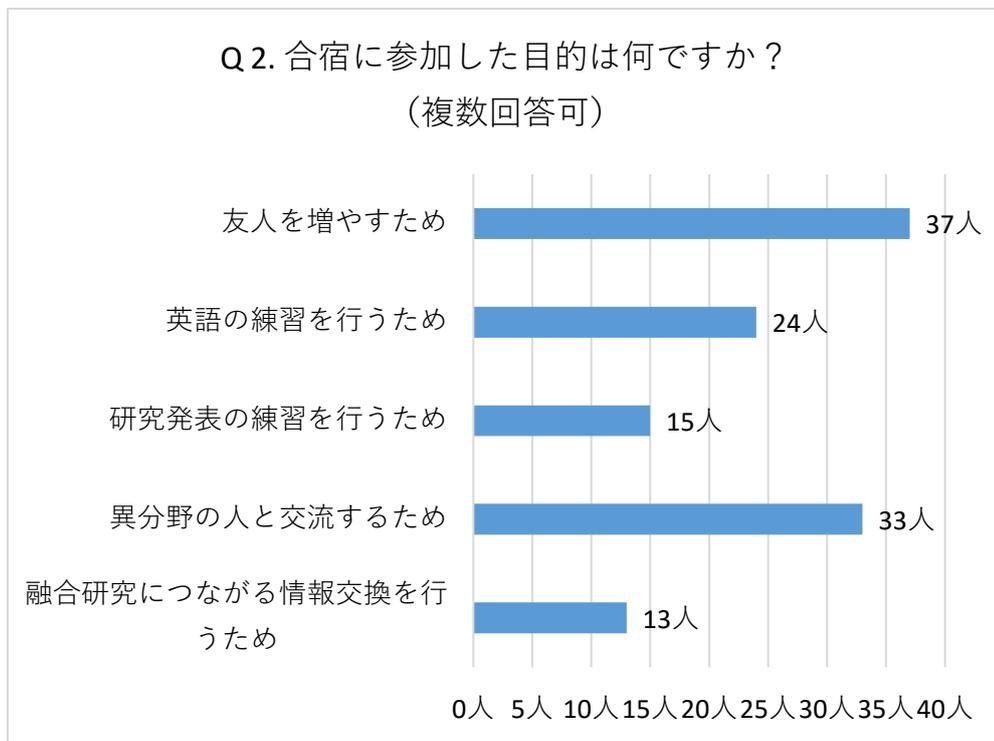
Q1 では合宿を知ったきっかけを聞いた。「合宿委員から」および「メールから」が最大多数を占め、友人からという回答もそれに次いで多かった。



その他の回答：

入学後の説明/入学時のオリエンテーション/オリエンテーション/from a colleague at sydney university./Professor abroad/recommendation from student support center/from PhD supervisor/postdoc who has collaboration with osaka univ/PROF.AKASHI/member of AKASHI Lab/colleagues/from a member of osaka univ.(prof.)/昨年度参加して

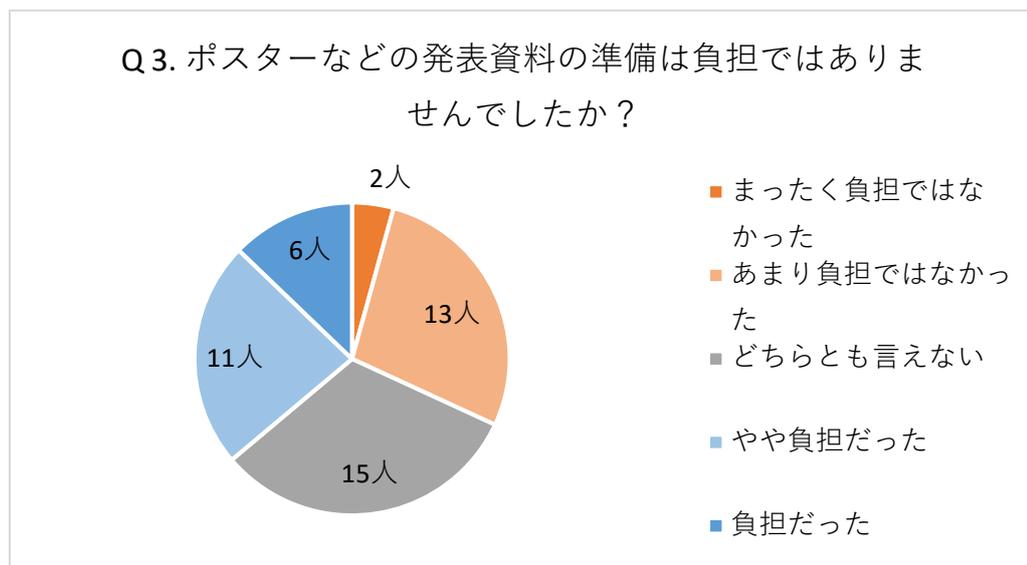
Q2 では、合宿に参加した目的を複数回答で聞いた。「友人を増やすため」が最も多く、次いで「異分野の人と交流するため」が多かった。また「英語の練習を行うため」という回答も多かった。



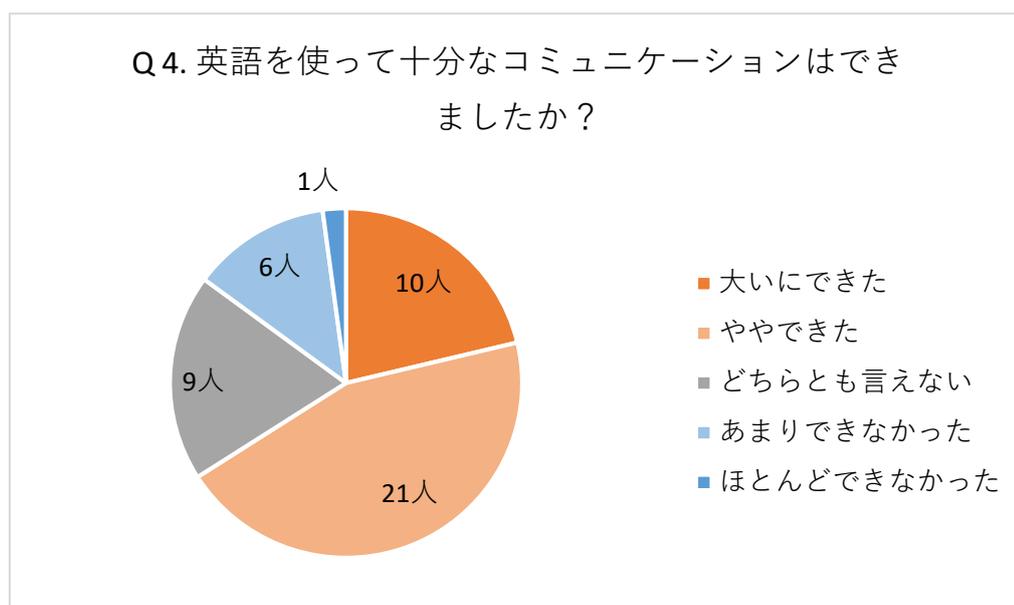
その他の回答：

いい出会い/外国出身の方と交流するため/To practice Japanese and to learn more about your wonderful culture/to learn about different research culture/environment/possibilities for future/Learn, get familia with the Japanese culture/to get more information about institutes at osaka univ./

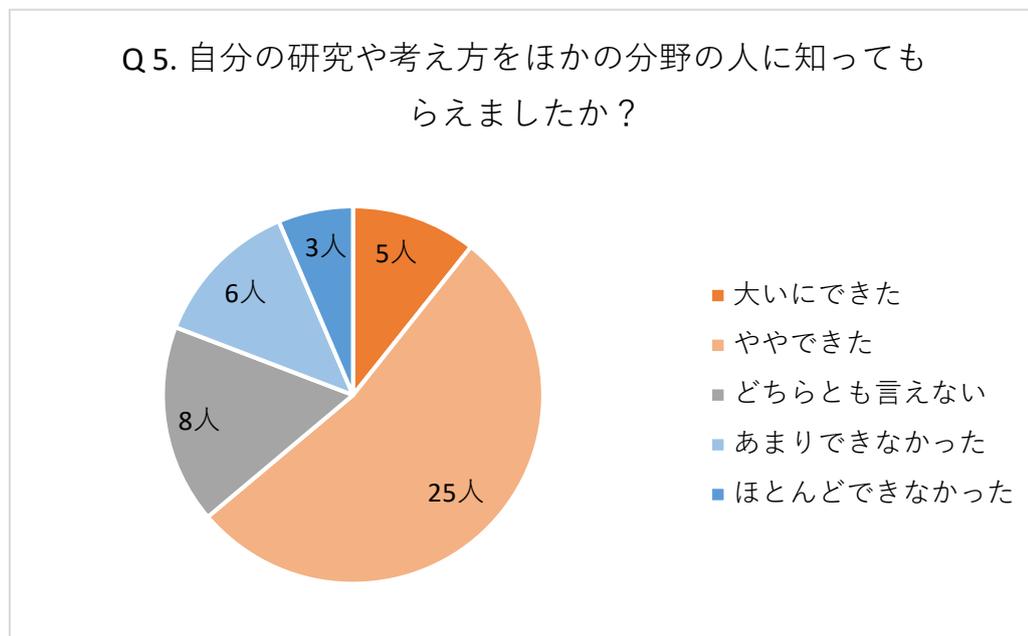
Q3では、発表資料の準備が負担になったかを聞いた。「まったく負担ではなかった」「あまり負担ではなかった」という意見と、「負担だった」「やや負担だった」という意見は総数がほぼ同じであり、また「どちらとも言えない」という意見も同数であった。



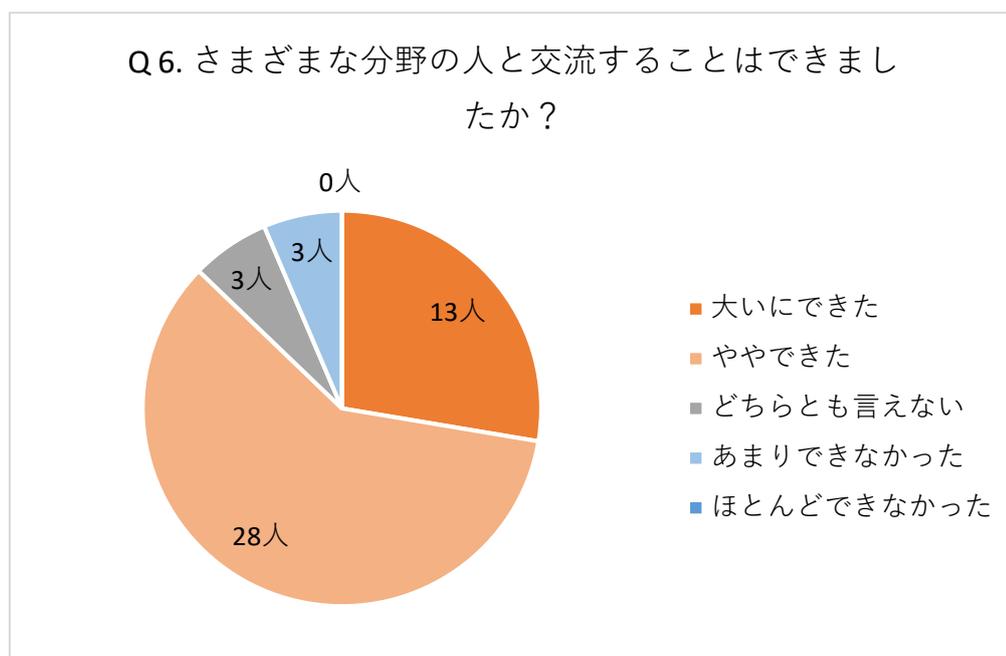
Q4では、英語を使って十分なコミュニケーションはできたかどうかを聞いた。「大いにできた」、「ややできた」という意見が過半数を占めた。「あまりできなかった」、「ほとんどできなかった」という意見は20%弱にとどまった。



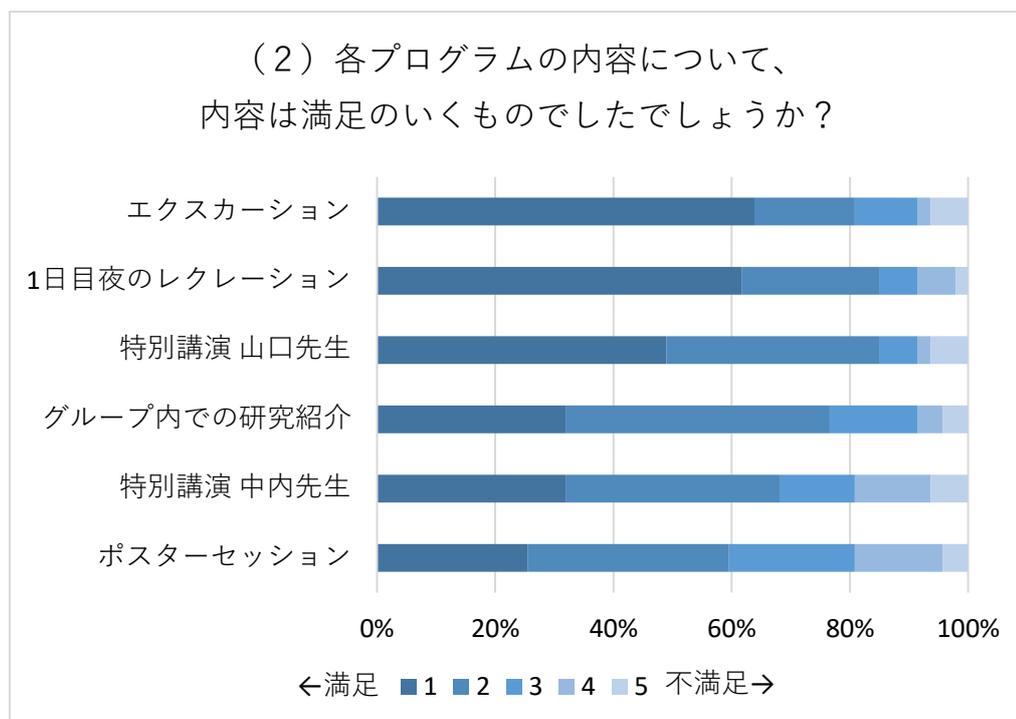
Q5 では、自分の研究・考え方を異分野の人に知ってもらえたかどうかを聞いた。半数以上が「大いにできた」、「ややできた」と回答した。



Q6 では、さまざまな分野の人と交流することができたかを聞いた。「大いにできた」、「ややできた」が41人とかなり多数を占めていた。



Q7～Q19では、各企画の満足度（内容・時間配分）を聞いた。まず内容に関しては、エクスカッションやレクレーションなど交流を深める企画が、非常に高い満足度を得られた。それに次いで特別講演やグループ内の研究紹介も満足度が比較的高かった。



各企画内容について、参加者からは以下のようなコメントを頂いた。

Q7. グループ内での研究紹介

it was very difficult to understand.

全体のタイムキーパーは必要かも

bigger groups→at least for introduction

A bit more time would be great. Too short to present

少人数でじっくりと話を聞けて理解しやすかった。しかし時間が足りず、満足に質問ができなかった。

ポスターと違って初めからじっくり話を聞けるのでよかった。でも時間が余った。

グループによっては時間が足りないところもあった。

時間が足りず自分の発表が出来なかったのがやや不満。班員の研究内容を知るにはとても良かった。

タイムキーパーは相手の研究をあまり聞く余裕がないため、最初から明文化し

たほうが良かったかもしれない。

Q 8. ポスターセッション

It was good for me to learn another field. もう少し自由にしてもいいかもしれないです、時間を区切らずに

場所によっては人の集まらないところがあった。

日本人で特に、友人や仲間内で固まったり後半ぐだったり退屈する外人の方が見受けられた。

large time per each session (20 mins short)

time limits are difficult to understand (when presentation starts)

Difficult to see all posters, and many Japanese students gave presentation to other Japanese in Japanese , so hard to join.

need more basic introduction for people not from same field

Poster location did not (attract?) so many people

too much Biology

Many people speaking in japanese , poster session should be in one room; one room was too dark.

様々な人の研究を聞け、また様々な人に研究を紹介できて有意義であった。

(自分も含めて)日本語で説明していた場合があったので、英語で統一できれば良かった。

楽しかったです。休憩時間が分かりにくいのは改善の余地あり。

時間の区切りを明確に！

ポスターの配置にむらがあった

外国人と日本人が混ざった掲示順の方がより活発に交流・議論が出来たかも。

配置の問題は来年改善していきたい。

Q 9. 1 日目夜のレクリエーション

It was fun!!

すごくよかった、楽しかった

めっちゃよかった

Fun!

このレクを通して、チーム内が非常に仲良くなってよかった。

すごく楽しかった。

チームの人たちと打ち解けやすい内容でよかったです。

来年からも続けたい！

行先決定は英語を話す良い練習になったし、その後の争奪戦がとても盛り上が

って最高の構成だったと思う。観光案内が各地の見所とか紹介した内容なら尚良かった。

問題もなく良かったです。

Q 10. 特別講演 中内先生

流暢過ぎて *I can't hear*. 内容も個人的にはそんなに興味なかったです。

両者とも講演は興味深いものでした。ただ、聴衆で寝ている人が多かったので、(お昼過ぎ+おそらく宴会疲れ) 1日目に行ってもいいのかもしれない。

サイエンスコミュニケーターに興味があるので、面白かったです。

Q11 との関連になりますが博士として研究を進める立場になった山口先生と研究を世に広める立場になった中内先生の対比が良かったです。

スピーキングのスピードが速かった・・・。

実践できる情報が少なかった

研究の話とコミュニケーターとしての話のどちらかに絞ってお願いした方が、より深い話をしていただけて良かったのかもしれない？

去年よりも寝る人数が減少したので、やはり講演時間の小分けは正解だと思う。

Q 11. 特別講演 山口先生

おもしろかったです。

Maybe more talks like this

English is important :-)

同上

山登りに自分も行ったりしているので親近感がわきました。

お話自体はすごく有意義だったが、研究の話が思ったより少なかったのが少し残念だった。

Q 12. エクスカーション

I spent good time to trip Kyoto "Kinkakuji temple".

雨が降らなくてよかった、宿の立地もよかった

もう少し長い時間だと嬉しいです

やや時間が短いように感じました。

昼食外食でもよかった

所要時間の目安などの情報がほしかった

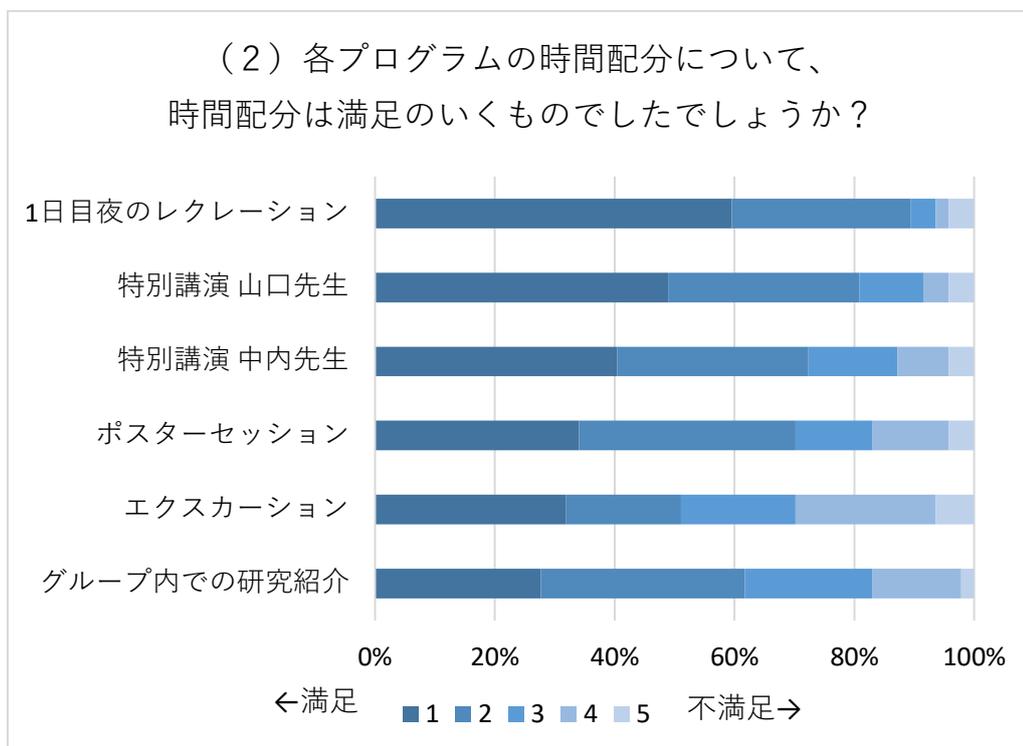
very fun

too short time

maybe more time would be nice

チーム内で親睦を深めることができてよかった。
 宿のアクセスが良くあちこちに行けたのが楽しかった。
 ただ、グループによってはエクスカージョン後にもう一度外出したい方もいた
 ので、グループエクスカージョン以外に自由時間を設けた方が良かったかもしれ
 ない（相応にリスクは増えるが）。

時間配分に関しては、レクレーション、次いで特別講演が非常に満足度の高い結
 果となった。



各企画の時間配分について、参加者からは以下のようなコメントを頂いた。

Q 13. グループ内での研究紹介

短時間で伝えるのはむずかしかった！
 よかったと思います、4人だったので参考になるか分かりません。
 人数が多かったのでもう少し人が欲しかったです。
 タイムキーパーを決めていなかった。
 もう少し長い方がありがたかった
 グループごとに人数が違ったので人が多いグループは時間がたらなかった
 少し短い気がしました

短かった

足りない

too short

quite short

more time for free discussion and excursion

too long

a little bit more (5 min.) would be fine

もう少し時間が欲しかった。(一人 15~20 min ほど?)

時間が短い。どうしても個々人の紹介が延びてしまう。タイムキーパーを設けるべき?

専門的な内容を理解するには少々短かった。

Q 14. ポスターセッション

少し長い

セッションをもっと長くした方がよい

時間が長いと思う

昨年より長くなってよかった

少し長かった

時間のお知らせが聞こえにくい

maybe longer but less frequent

maybe some (best) poster could be selected to give a presentation next day in front of every one

quite long...

quite short

too many

各タームで発表は1つずつしか聞けなかったが、そもそも企画の際に、発表の途中から参加しづらいから各ターム1発表分と考えていたため、狙い通りになったと思う。

もう少し長くても良いかもしれない。

いつ発表時間でいつ休憩時間なのかが分かりにくかった。

発表人数の割には長すぎた気がする。後半ほぼ固まって雑談に興じていた。

Q 15. 1日日夜のレクリエーション

適度

採点方法の詳細ルールが不足、少しトラブルがあった。

we are tired! But it was fun!

Q 16. 特別講演 中内先生

できれば午前がよい

もう少し質疑応答が長い方がよい。

若干余裕がなかったかも。

質疑応答が短いかもと思ったが、山口先生の場合は余ったくらいだったので丁度良かったのかも…？

Q 17. 特別講演 山口先生

できれば午前がよい

Extremely useful

同上 (質疑応答が短いかもと思ったが、山口先生の場合は余ったくらいだったので丁度良かったのかも…？)

Q 18. エクスカーション

もっと長くして欲しい

時間がみじかいと思う。

もう少し時間が欲しかった

短かった

more sightseeing time would be good

longer would be nice

could be learge

Would be nice if longer ,ex 12p-7p

short time

very short

too little time

more time = better

超過して 3.5 h 散策していましたが…。3.5 h ぐらいが良かったかなと。

思った以上に移動時間に時間を費やした。

金閣方面に行きましたが移動時間が長いのと寺社仏閣の閉門が 5 時までだったのであまり見れませんでした・・・

バスの利用で迷ってしまった。

18 時に絶対集合だと厳しいですが、その後の BBQ 開始までの 1 時間の猶予も含めて、ちょうど良かったと思います。

神社仏閣を閉まるのが早いので、来年はエクスカーションを午前に持ってきたほうがいいのかも知れない。

Q20-Q23 では来年以降の合宿について意見を募集した。

Q 20. 全体で論じたいグループディスカッションのテーマは何ですか？

優しいテーマ、難しすぎないテーマ

研究力上昇の方法

もし生まれ変わるなら何になりたいか

自分たちの研究から何か商品を作る

研究の発信は皆同じような内容になりがちだった、もっと個性や面白さがでるディスカッションテーマがいいと思う。

各国の研究生生活の違いについて

初対面の異文化の人とどのように交流すればよいか。

研究倫理について

研究者に必要なものは？PhDに進むには？

Collaboration between Ph.D students

Academic career opportunities in Japan and abroad

various career paths for students

career oportunities in Japan for foreighner

Hot topic in each field of reserch

Structural biology,computation,phisics

engineering/maths

involvement of economics might be interesting

A bit more research discussion in the groups!

nanotechnologie, medicine,chemistry

「世界の政治関連」せっかく各国から参加者がいるからそれぞれの国の人の立場の話が聞けて面白いかも。(UKのEU離脱など)

物議をかもしような技術や話題になった科学ニュースは、どんな分野の科学者にとっても興味があるはずだし、就職を目指す人にも考えてほしい内容であると思うのでやってみたいです。

大学院生のうちにやっておくことは何かとか、将来の夢はとか、ローテーション形式でグループを交代させながらやりたい。

研究内容だけでなく、研究者としての考え方や身の振り方を話してみたいです。テーマにもっと柔軟性を持たせたほうがいいのではないかと思った。進路の話などは面白い議題ではあるがどうしても1つの解に収束してしまいがちであるし。1分間ショートコント、最強の生物を創ろう、こんな道具あったらいいのにな(その開発のためにはどんな技術が必要か)、

研究に関する時事ネタ。

Q21. ポスターやグループディスカッション以外に「自分だったらこんなプログラムを用意する！」というものがあればぜひお聞かせください。

伝統的な遊び、ボードゲーム等、サイエンスカルタ、百人一首
文化の紹介

グループでゲーム(絵しりとりのような)を増やして欲しい
ゲームを増やしてくれても嬉しいかも、劇とかショートコントとか
花火

自国の紹介しあい

花火

花火

Maybe more talks by students ~ discussion of research (一部判読できなかったため~で省略)

*More lectures useful for future of students career in academic
all perfect :)*

*May be changing a groups during retreat would make us to meet more people.
maybe we can have another set of short discussions about hot topic in science.
inviting more speakers*

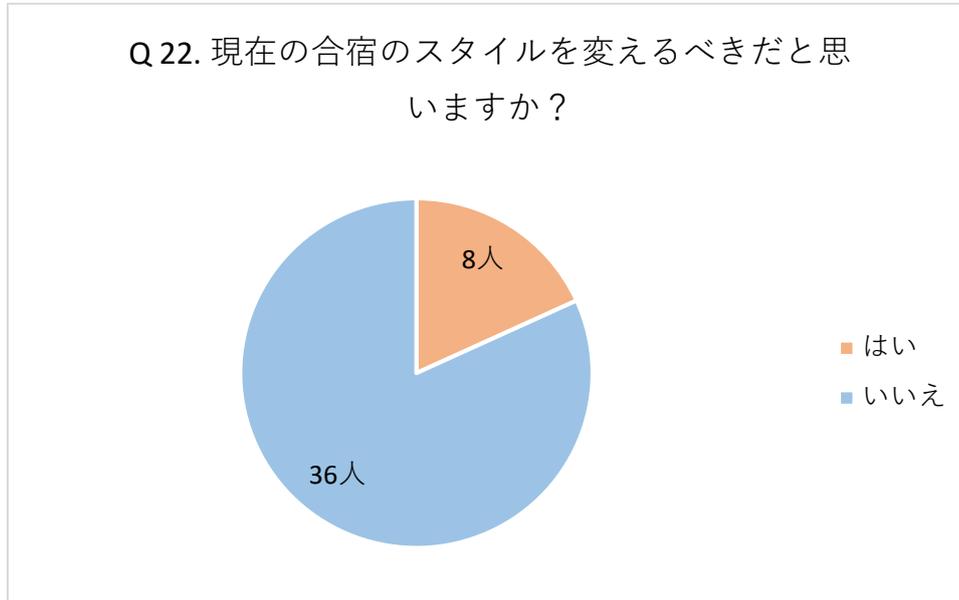
cultural events like: Japanese movie or dance

Q20 に同じ (大学院生のうちにやっておくことは何かとか、将来の夢はとか、
ローテーション形式でグループを交代させながらやりたい。)

博士課程以上の人の口頭発表

参加者何名かに研究のプレゼンを行ってもらう。参加者同士の日本語講座、英語講座。

Q 22. 現在の合宿のスタイルを変えるべきだと思いますか？



Q 23. 具体的に何を変わるべきだと思いますか？

一泊二日でもいいかも

もっと時間に余裕が欲しいです(楽しかったですが)

最終日のディスカッションは有意義だったが疲れで大変だった。

プライベートな空間があったほうが参加しやすい人はいるかも知れない

more activities/competitions can bind the team better

More non-biologists to encourage interdisciplinary communication

Include people from different diciplines. This year , they were mostly biologist

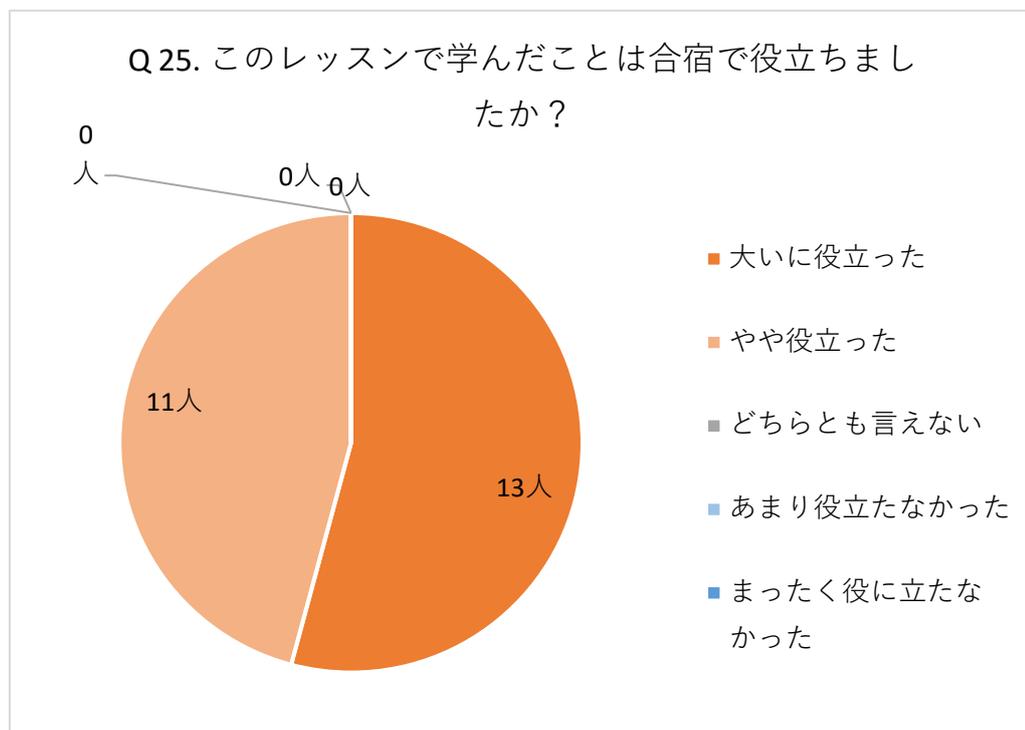
海外勢やドクターには少し生ぬるい内容かも (サイエンス的に)。

ディスカッションを細切れでも良いので多めにできたらいいかなと。

Q20 関連ですが、ディスカッションのスイッチングをこまめにしたい。

ポスターセッションの時間を削って、フリーのディスカッションに充てる。

Q25 では、合宿前後企画の一つとして行われた英会話レッスンに関して、レッスンで学んだことが実際合宿で役立ったかどうかを聞いた。全員が「大いに役立った」、あるいは「やや役立った」と回答した。



12 英語クラスアンケート

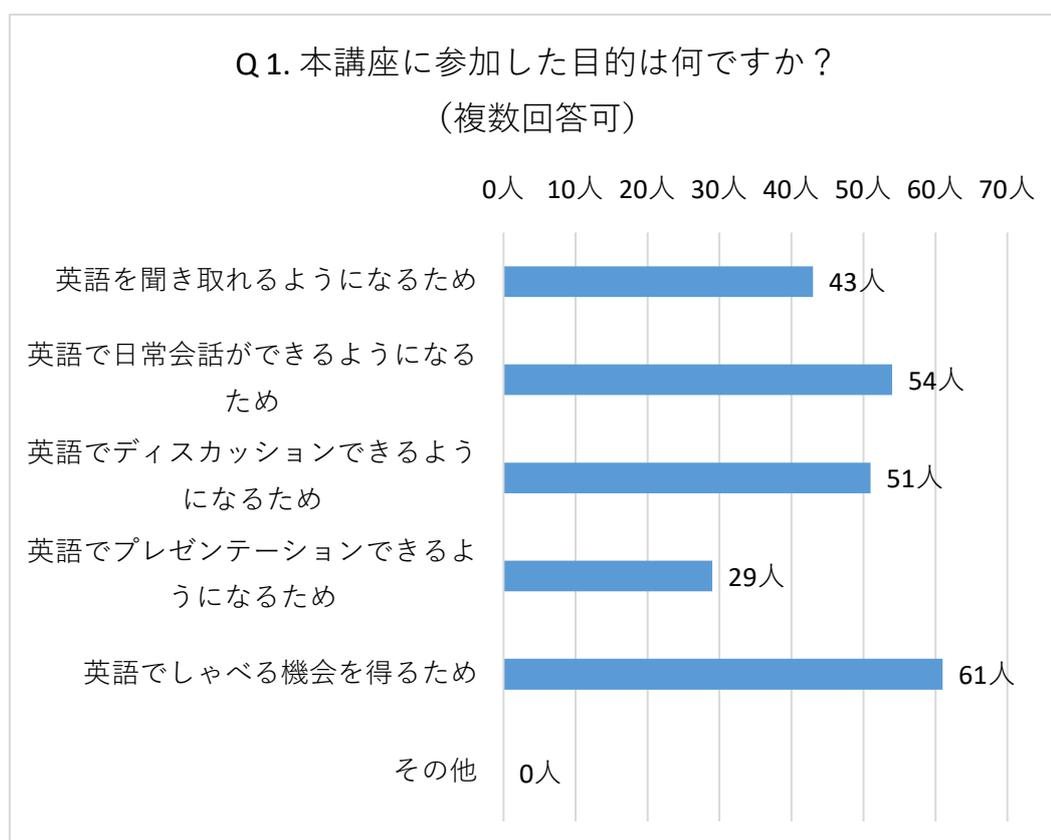
- 目的

英語クラスの実施についても反省点や好評だった点を明らかにするため、レッスン参加者にアンケートをとった。参加者数は30人であったが、複数回のレッスンに参加した人に対してはそのたびにアンケートをとったため、合計回答数は82となった。

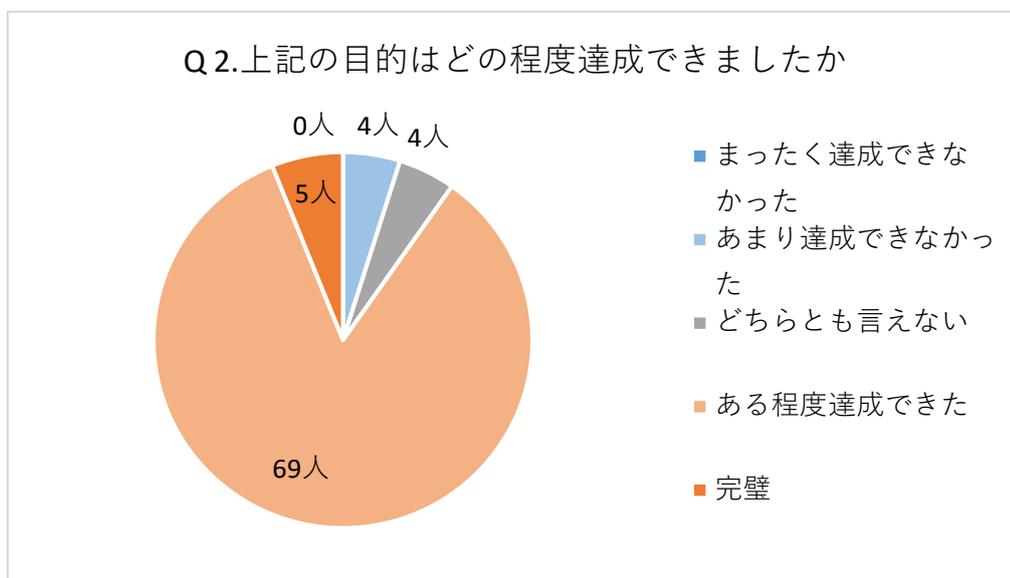
- 結果

アンケートの結果は以下ようになった。

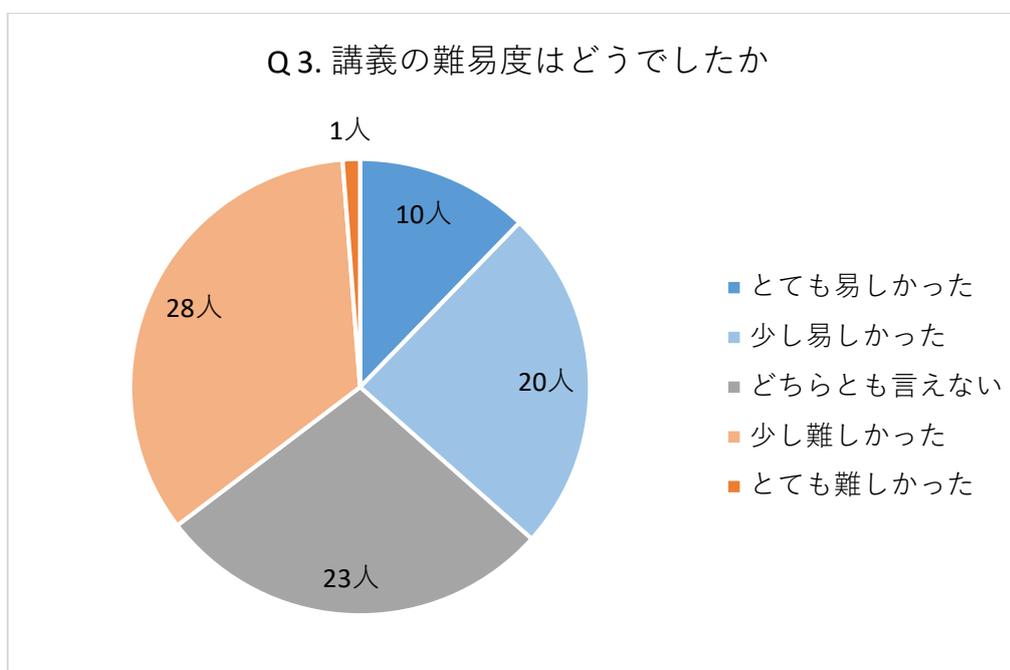
Q1では参加目的を聞いた。「英語でしゃべる機会を得るため」が最も多く、ついで「英語で日常会話ができるようになるため」となった。



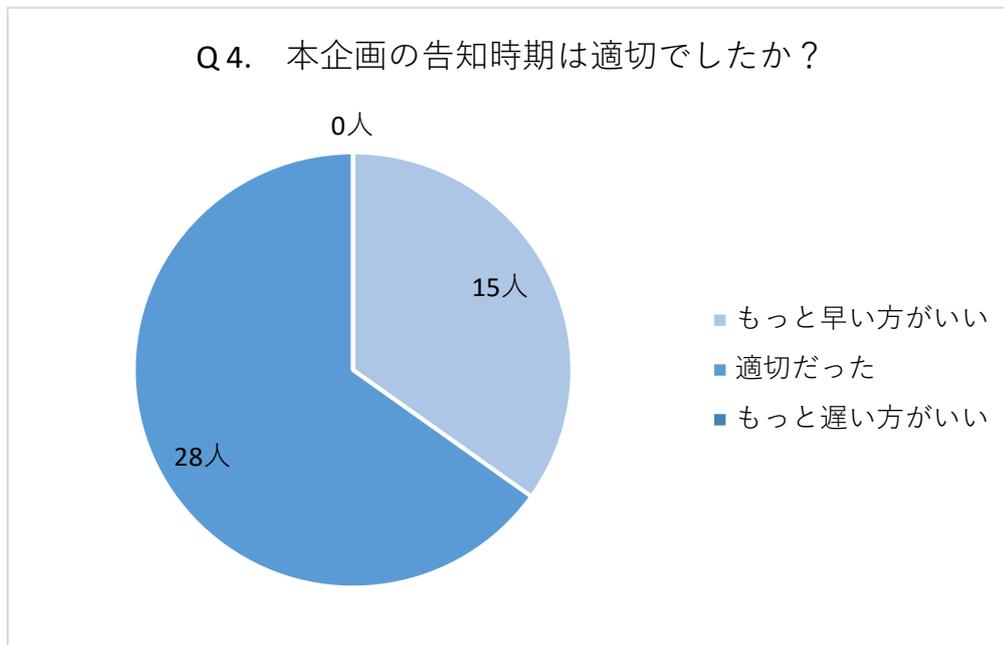
Q2は参加目的を達成できたかを聞いた。多くの参加者が参加目的を達成できたと答えた。



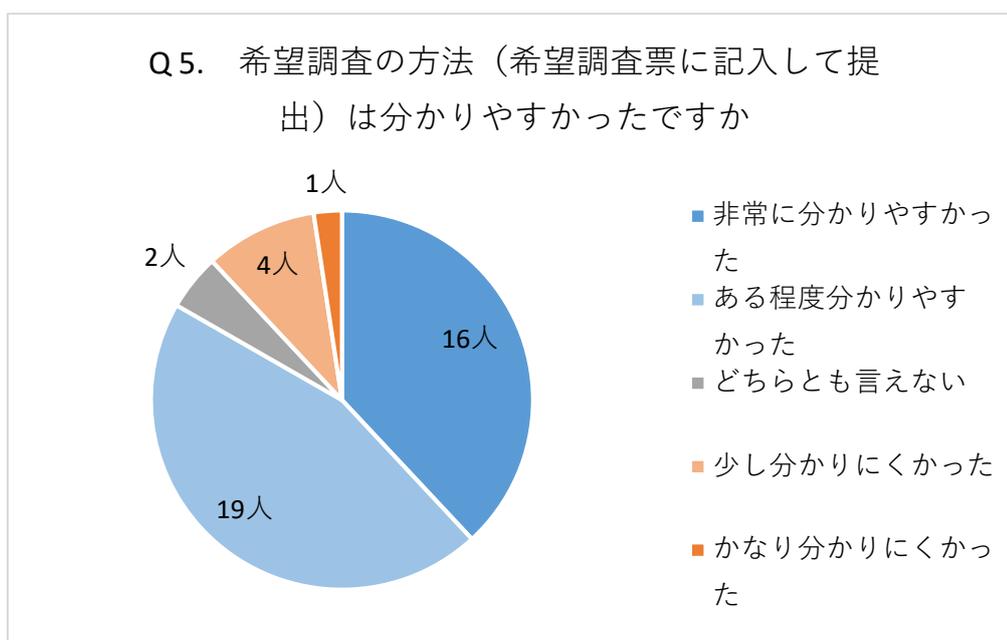
Q3は講義の難易度を聞いた。易しいと答えた人から難しいと答えた人までかなり平たくばらついた。



Q4 は告知の時期について聞いた。もっと早いほうがよかったという参加者が3分の1程度を占めた。



Q5 は希望調査の方法について聞いた。大多数の参加者からは分かりやすいとの反応を得た。



Q6 では参加者に送った各自が参加するレッスンの表について聞いた。これも見やすかったという人が多かった。

